

第七章 災害

第一節 明治の災害

◆周西村

明治四十三年八月十一日ニ於ケル山崩及其他水害ノ惨状ハ實ニ空前ノ天變事ニシテ就中山崩ニアリテハ史上未タ曾テ比類ヲ見ザル所ニシテ其尤モ近似ノ例ヲ擧グレバ聖武天皇神龜四年上總國言ス山崩レテ百姓七十人壓死ス云々是レ實ニ一千八百八十三年前ノ事ニ屬ス然シテ今回ノ山崩ニアリテハ君津郡内ニシテ既ニ七十人ノ死亡者ヲ出シタリ其惨状推シテ知ルベシ

サレバ被害者ノ救護治療死體搜索埋葬ヨリ遺族ノ慰問救恤道路ノ開通橋梁ノ架設埋没セル宅地田畑ノ復旧等ノタメ有志者ハ義捐金ヲ募リ町村會ハ救恤ヲ議シ其個人タルト團體タルトヲ問ハズ或ハ勞力或ハ金品ヲ以テ遭難者ニ同情ヲ表セザルモノナシ事 天聽ニ達スルヤ茲ニ畏クモ兩陛下ノ恩賜ヲ拝スルニ至レリ誰カ感泣セザランヤ

君津郡内ニテ當時ノ被害ノタメ死亡セルモノ七十人負傷者三十七人全潰家屋百二十七戸ナリ。

以下省略

『明治庚戌遭難録』

「明治43年水害紀念帖」

～資料出典(青蓮寺蔵)～

<写真2>

遭難者遺族ニ對シ兩陛下恩賜金傳達式
(君津郡會議事場ニ於テ)



<写真1>

周西村小學校内ニ於ケル
岡君津郡長主催遭難者大法會



<写真4>

飯野村上飯野大福寺庫裡潰レ跡
并第五部会員



<写真3>

飯野村下飯野根崎山崩
并第二部会員



は孤立状態になり人見から東南方の田畑は一面に泥海と化した。

上流より家や流木、堆肥の山が数知れず押し流されて来た。人見地区の大半は床上まで浸水し、青蓮寺の表通りは川のように流れが強く、大船が川端脇の道路に繋がれていた。人見連山は山津波のため土砂崩れの箇所が多く裸山となって立木はことごとく下に落とされていた。青蓮寺も裏山が崩れて本堂・庫裡共倒壊した。山下の川岸にあった建具屋（島田）の一家族と職人が流された。二階にいた職人は、人見橋に家がぶつかったとき二階から橋に飛び移り助かった。人見神社の大鳥居もこのとき壊れた。

❖ 仁王門・仁王尊と金毘羅神社

仁王門は人見神社表参道より第一、第二石段を登った現金毘羅神社前広場付近にあった。旧金毘羅神社は、ここから人見神社社殿の石段をさらに二〇〜三〇m上った右側に建っていた。この豪雨で人見神社社殿へ上る石段

の三分の一が崩落し、山土が金毘羅神社と仁王門をのみ込み小糸川に落下した。押し潰された仁王門は後日掘り出され、中より仁王様を取り出したがバラバラで無残な姿だった。

❖ 古峯神社

第一石段を上がり左側小高い所にある古峯神社は被災を免れ元のままである。古老の話によると、災害発生当時、古峯神社の脇には一本の大松と角屋という店があり串だんごを売っていた。



古峯神社

老夫婦は毎夕、古峯神社に御燈明を灯し、お参りするほど大変信心深い人だった。山崩れに遭遇したとき自分の家のまわりは土砂と落ちて来た立木で埋もれ、いつ倒壊してもおかしくない状況だったにもかかわらず、古峯神社のご加護で神社脇の一本松が角屋を庇い店には土砂一つ入らなかつたという。当時、木橋だった人見橋も濁流と増水のため流失した。（明治四三年「水害紀念帖」川名邦五郎著）

❖ 坂田村の被災状況

古老の話を抜粋すると概ね次のようになる。明治四三年の災害は、一ノ坪あたりの田の用水に使われていた溜池が山崩れで全部埋まり土砂で家が押しつぶされた。

ある家では納戸へ大きな櫓が飛び込んできた。全壊や半壊の被害もかなりあったようで、長福寺も本堂が壊れ、改築する時に調べたら柱が二一〜二二本折れていたようだ。雨は一日間降り道が川みたいになって水が流れてい

た。倒壊した家屋（母屋）八戸、死者は一二名にのぼった。

歴史的にみれば天明の飢饉や安政の大地震といった災害があったが、このように多くの死者を出したのは、この時がおそらく初めての経験だったのではないかという。

第二節 大正の災害

❖ 大正六年の被災状況（坂田）

大正六年九月三〇日、台風と津波に襲われた。台風は北西風を巻き起こし津波を呼んだ。本名輪海岸の船溜りが大破し、波打ちぎわに荷出しされていた建て込み前の木篋はことごとく流出したが、これによる家屋の倒壊は一軒にとどまっている。海岸では舟が全滅して国道一六号まで海水が上がり腰位まで浸かった。

❖ 大正一二年の関東大震災

大正一二年九月一日午前一時五分、突然発生した大地震が関東地方南

部を襲った。その規模はマグニチュード七、九。震源地は相模湾西北部と計測され、当地方にも甚大な被害を及ぼした。

この地震による周西村の被害状況を見ると、人的被害は死者二人、負傷者七人。建物被害は、総戸数五二〇戸の内、住家の全壊九〇戸、半壊四八戸、大破一〇八戸を数えた。非住家にいたっては全半壊、大破合わせて三一七戸におよび、建物被害だけでもその被害額は約五〇万円と見積もられた。

またこの時、人見神社の本殿が崩壊し、おりしも二百十日の平穩無事を祈禱中の神官がその下敷きとなり死亡している。

この地震では役場庁舎、及び小学校も被害にあい、小学校舎は全壊し役場も半壊となった。この他、駐在所は大破し隔離病舎が全壊している。

寺社の被害では先の人見神社の全壊以外にも大和田大蓮寺と中野の長安寺が全壊、坂田長福寺・人見青蓮寺・久

保増光寺・同大雲寺が大破した。

震災直後、周西村では、村長による震災状況の調査が命じられ、助役は小学校に出張、被害状況を視察し、その他吏員は村内を一巡して罹災の状況把握に努めた。それにより、被害状況が次第に明らかになり、以後の復興計画が立てられている。

崩壊した小学校建物、本校舎・雨天体操場・裁縫室・物置など全部が崩壊し、その惨状は目もあてられない状況だった。幸い放課後で、職員及び児童が数名残っている程度だったので死者はなかった。この校舎倒壊のため、村では校舎再建までとりあえず小学校児童を坂田長福寺・人見青蓮寺の二カ所の寺院を修繕して収容し授業を行っている。

再建計画では、一般経費の節減により生じた財源と四五、〇〇〇円の借入金で賄うことにした。また、学校設置の場所を地盤のより強固な村の中央（現Dマート敷地）を選び移転するこ

ととし、大正一五年九月に総経費五二〇〇〇円余りかけて校舎を再建した。

一方、半壊した役場庁舎は震災後、一時この年新築された坂田漁業組合事務所を借り受けて執務することになった。その後、半壊した庁舎は修繕を施すこととし、大正一三年四月に修理を完了、間借りしていた仮庁舎から移転した。これと並行して隔離病舎、巡查駐在所の再建、修理が行われ、隔離病舎は昭和三年三月に四、九〇〇円余りの修繕費をもって修理を終えている。

（坂田の歴史散歩「大地震とその復興」色部昭男著）

*震災の証言（大和田）

関東大震災は、六歳位の頃に体験した。当時、脚を骨折していたので東京の名倉堂整骨院に治療に行き関東大震災の四、五日前に家に帰ってきた。そのままいたら死んでいただろう。

震災時の記憶としては、大蓮寺の留守番をしていた一〇歳位の子が、ワアワア、オツカンがって、ネエテ楨の木

にしがんで、とうとう、フツコンジャツタ。オーバーに言えば、家の庇が地面に着きそうになる位に動いたつぺ。立っていられネエダモン。コロバツテエダ。当時の自宅は草屋根で火災にあったという。（中野久義 九五才）

*震災の記憶（大和田）

関東大震災は実に悲しかった。東京などは火災を起し全滅し、火災の炭が当地へ降って来た程だった。時刻は一時五〇分頃、昼食時だった。

はじめは遠くの方から「ごうごう」と風でも吹いてくる様な音がすると思ふ間に、ぐらぐらと動き初め急いで外に出るが、立って歩けぬ位だった。老人は、はって逃げ出す始末で、外に出て家を見ると今にも倒れるかと思つて気が気で無かった。それからたえず小さい地震があつて家に入らず夜は野外で寝た。暫くたつてからあたりを見て回ると、地面は網の目の様に割れている。割目の廣さ五寸、一尺位も口をあけてあぶなくて歩けない。潰れた人家

が随分あつたが、大和田では潰れた家はなく、傾いた家はかなりあつた。また居山の頂上は三尺位の割目がどこまでも線になつている。大雨が降ると山崩れしないかと心配したが、その後、被害もなく永い年月の中で塞がり元通りになつた。

（大和田農協常務 茂田正治）

*震災の記憶（坂田）

私の家は坂田浦のそばで、海苔漁や魚貝漁で生計を立てていた。家の裏は浜で五〇m先の海中に鳥居があり、毎年浦祭りが行われシーズンになると貝採りで賑わつた。

台風などで北風が吹くと波が屋根まで吹き上がり困りました。母親から聞いた話だが、津波は家の前の道路（今の道路は昔の道路より七〇cm位高い）で膝位まであり縁の下をえぐられたと申していた。身の危険を感じた母親は、弟をおぶつて山の方へ逃げたそうだ。

（荻込繁雄）

第三節 昭和の災害

◆昭和一三年の集中豪雨

昭和一三年秋、周西の南方を流れる小糸川が稀に見る集中豪雨で大氾濫をおこした。坂田・中野・久保・中富・釜神・人見・神門と当時の周西駅（君津駅）を中心とする見渡す限りの水田、畑地はもちろん、これらの集落の住宅は、ことごとく床下から床上浸水となり、家財道具はいうにおよばず、家畜の被害、とりわけ各家庭の堀井戸（当時は水道はない）と便所とが一緒に濁流におそわれたのだから、その惨状は想像に絶するものだった。保健衛生上の被害は日に日に増し拡がった。いま六〇歳以上の方々は記憶新たなものがあるろう。当時、君津駅前には借家住まいをしていた筆者は、駅のホームが僅かに顔を出し、周西小学校の校舎が湖中に浮かんでいる舟のようにみえ、隣の中富村へ水見舞いに行く為に、私は上着を頭にのせ、太い竹棒を頼りに、濁

流の道を決死の思いで辿りついた体験から、小糸川の怒りー大洪水が、いかに恐ろしいものであるかを身を持って知っている一人である。

（「思い出の坂田（四）」小川政吉）

◆昭和三五年のチリ地震津波

五月二二日、一五時一分一四秒、震源はチリ中部の都市バルディビア近海で、規模はモーメントマグニチュード（Mw）では金森博雄の推定によると九、五である。

Mw九、五という値は、近代地質学の計器観測史上最大であり、歴史地震を含めても最大級である。

本震発生から一五分後に約一八mの津波がチリ沿岸部を襲った。太平洋を伝搬する津波の周期は非常に長く、ハ



岩手県大船渡港民家に
乗上げた漁船
(昭和35年)

ワイ島のヒロ湾では高さ数フィート程度の第一波到達約一時間後に最大波が襲来し、海岸線から八〇〇m以上内陸まで壊滅的な被害となった。

日本への津波の影響は、地震発生から約二二時間半後の五月二四日未明に最大で六、一mが三陸海岸沿岸を中心に襲来し、日本各地に被害をもたらした。被害の大きかったのはリアス式海岸の奥にある港で岩手県大船渡では五三名、宮城県志津川町（現南三陸町）では四一名、北海道浜中町霧多布では一五名が死亡した。

（一九六〇年のチリ地震津波災害五〇年目の現地調査・二〇一〇年二月）

*津波の状況（人見）

当日、延縄漁に出漁しようとして朝四時ころ、小糸川に船を出したところ潮位が高いうえ引き潮の流れが異常に早く、川尻まで行かないうちに川が干し上がって船が動かなくなった。『なんだ、なんだ』と知っているうちに今度は、もの凄い勢いで潮があげてきて船が浮

いた。「おかしい、変だ変だ」と仲間
の舟と話していたが、とにかく沖に出
てみようということになり沖に出てみ
ると潮の流れが異常に速く、刺し網の
人達がボンデン（目印の旗）が無くな
ったと大騒ぎをしていた。こんなに潮
流が速くては漁にならないだろうと小
糸川に帰ってくると、今度は川が干上
がっていた。

しばらく待っていたら、またものす
ごい勢いで潮があげてきたので大急ぎ
で船を「船だまり」に入れた。川の堤
防には大勢の人が集まっていてチリで
大きな地震があり、その津波が日本に
押し寄せ、東北地方では大きな被害が
出ていると話してくれた。結局その日
は沖に出ても漁をしないで帰った船と
漁場によっては「変だ変だ」と思いな
がら一日漁をした船とがあった。

『神門』石井澄雄著

＊津波の状況（坂田）

チリ地震の時は凄かった。いったん
水がズーッといきなりきた。「これは

普通と違うな、何か変だな」と思いな
がら私は見ていた。二回目がまたズー
ッと上がってきたが大したことはない
と思いき逃げなかった。見る見るうちに
干上がったからよく見えた。満ち引き
は数回あっただろう。最初の波が一番
大きかった。波の高さは道路を地上げ
したスレスレまでで、路面までは上が
ってこなかった。

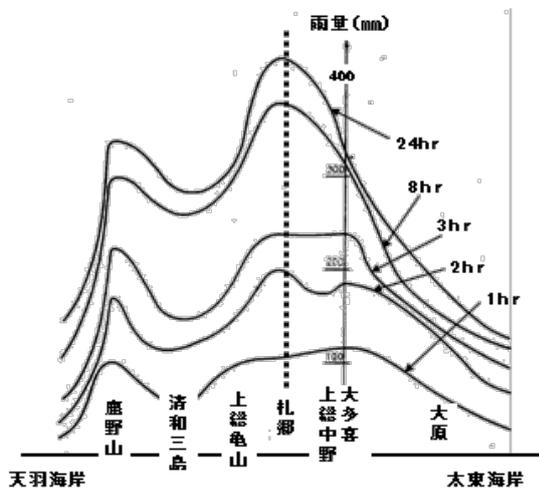
その他には、神門の田圃が曾根新田
から入ってきた塩水に浸かり、現高田
工業や吉川工業社宅付近の田圃も浸か
ったそうだ。
(荻込繁雄)

✦昭和四五年の洪水

昭和四五年七月一日の大雨は、南岸
を低気圧が東北東にゆっくり進み、前
線の影響で房総南部の丘陵地に局地的
な集中豪雨をもたらした。総降水量は、
札幌四三八mm、坂畑三六六mm、香木
原三〇四mm、三島二八二mm、糠田二
七〇mm。また、清澄一五五mm、木更
津一四三mmとなり、ことに一〇時〜一
一時にかけての一時間に大多喜一一六

mm、札幌一〇五mmを記録した。

房総農業高校、鹿野山の記録による
と、六月三〇日九時から、七月一日九
時までの一〇mm、七月一日九時から、
二日九時までが二一六mmであった。そ
のため小櫃川・小糸川・湊川・養老川
が大氾濫し大きな被害が出た（死者一
七名、行方不明者三一名、家屋全壊一
二三戸など）。県南部の丘陵地域には災
害救助法が適用された。七月一日の集
中豪雨の状況をみると、午後三時三〇



各時間最大雨量分布断面図

分頃から小糸川は急激に増水し、降り続く豪雨で堤防は決壊。各地で床上、床下の浸水を起こした。人見地区も午後八時ついに床上浸水となり釜神・中富・久保・外箕輪・三直・練木などの広範囲にわたった。小櫃川では集中豪雨を「この土地では軒先の雨垂れが一



君津町内の水没

時間棒のように続くと、川の水が耕地に上る」と語り継がれている。まさにこの日のことである。大正十年十月十日の大暴風雨も被害甚大であったがそれよりもはるかに大きいと『小櫃村誌』は記している。



人見地先(町道1号幹線道路陥没・水道管切断)

＊小糸川の改修
昭和四六年三月五日着工し、昭和四九年九月三〇日竣工した。
〈改修計画〉



河川敷内改修工事状況

- ・ 工事区間
- ・ 人見橋～中村橋(二二、一六八km)
- ・ 計画雨量 二八六、三mm / 二四hr
- ・ 計画高水量 七〇〇³m³/s
- ・ 計画高水流量 人見橋～中村橋 七〇〇³m³/s
- ・ 松川橋～中村橋 五〇〇³m³/s

(昭和四五年度発生「災害復旧助成事業」計画概要書 千葉県土木部)

河川課)

*昭和四九年の災害記憶(坂田)

昭和四九年の災害もひどかったよう
だ。崖崩れ、山崩れで家の全壊・半壊・
小破があり、床上浸水が二〇〜三〇軒。
崖崩れが一四、五軒あったという。

第四節 平成の災害

❖東日本大震災

平成二三年三月一日、一四時四六
分頃、三陸沖を震源とした「東北地方
太平洋沖地震」が発生した。地震の規
模を示すマグニチュードは九・〇。最
大震度七(宮城県栗原市)だった。
君津市の震度「五弱」。三月二日、
津波警報発表(内湾二m)。津波観測値
は木更津港で二、八三mの潮位が観測
された。

〈公共施設、設備への被害状況〉

- ❖ 人的被害…負傷者二名(高齢者小指
負傷ほか)。帰宅困難者二名。
- ❖ 火災…なし。

❖ 建物被害…全壊、半壊なし。

一部破損九棟。床上浸水・床下浸水
なし。液状化による建物被害なし。

❖ 避難者数…最大二〇名(避難所二カ
所開設)。

❖ 水道…水道本管破損四カ所。断水四
五〇戸。

❖ 下水道…なし。

❖ 道路…県道(道路陥没一カ所)。市
道(市道ひび割れ一カ所)。

❖ 停電…最大一四〇〇世帯。

❖ 本庁舎…一、五、七、八階の天井材
一部落下、外部床タイルひび割れ。

❖ 小櫃保育園…園庭一部ひび割れ。

❖ 校舎…南子安小壁にひび、周西小外
壁モルタル落下、君中体育館ガラス

五枚割れ、周南中外壁複数落下、亀
山中体育館壁外れかけ。

❖ 県道…道路陥没一カ所(水道制水弁
からの漏水)。

❖ 市道…ひび割れ一カ所。

❖ 水道本管破損…四カ所。

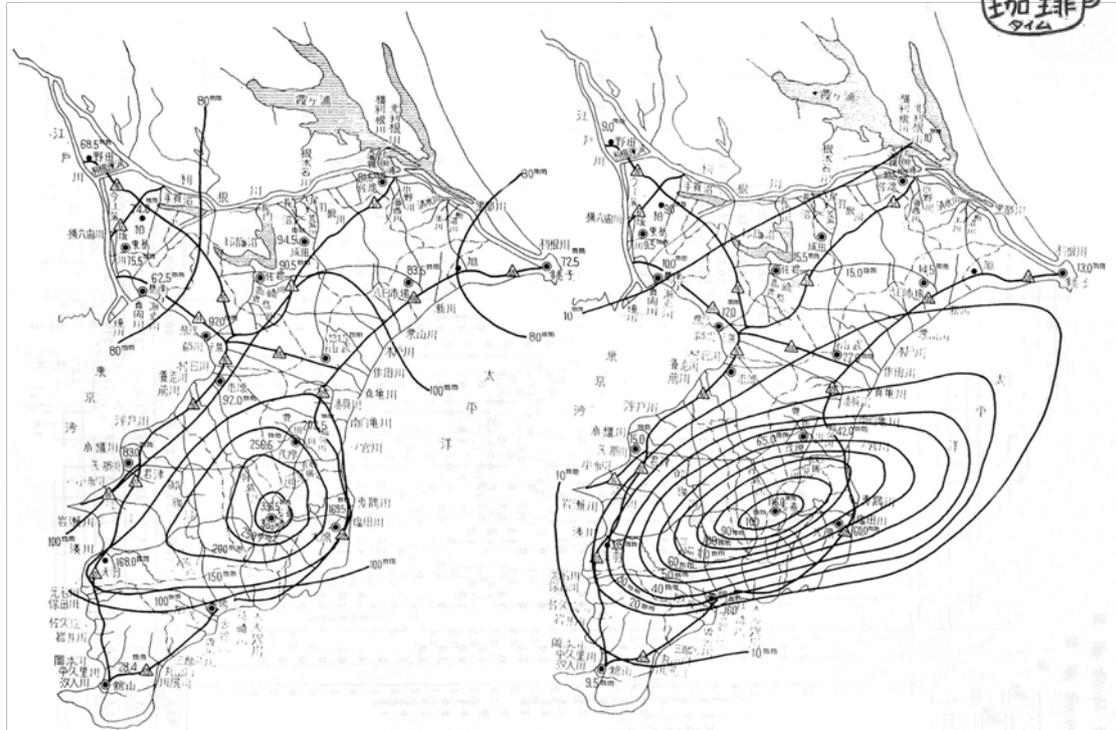
※出典(君津市総務部危機管理課)

第二次世界大戦・空襲の記憶

昭和一九年三月一日、東京大空襲
はよく見え火の粉が飛んできた。昭和
二〇年、戦争の終わり近くに空襲があ
り鹿野山や三舟山方向から艦載機が飛
来して房総周西に沿って飛んだ。ある
日、グラマンが三機飛んできて機銃掃
射を受けた。標的は私たちでなく三〇
m位後ろにあった銃座から撃つ場所で、
その機銃が「タン・タン・タン」と音
がしたかと思うと旋回してきたグラマ
ンが「バリ、バリ、バリ、バリ」と物
凄いスピードで機銃掃射し飛び去って
行く。怖かった。周西周辺は時々、
グラマンの機銃掃射があったが怪我を
する人はいなかった。この近くはB²⁹
が上空を飛んで行くだけで爆弾は落さ
れなかった。炊事当番していたら空襲
警報が鳴ったので防空壕に逃げ込んだ
ら番兵がいて「クワバラ、クワバラ」
と手を合わせていた。「こりゃ、戦争
に負けるな」と思った。

(T・Y)

昭和 45 年 7 月 1 日関東地方南部の大雨による
千葉県水害報告書



時間別等雨量線図

表-1.1 気象観測資料

	時刻	3 時	6 時	9 時	12 時	15 時	18 時	21 時	24 時
銚地方 气象台 子台	海面気圧	1008.7	1009.1	1009.8	1008.0	1006.9	1005.7	1005.7	1005.0
	降水量	0.0	0.5	8.0	13.0	26.5	17.5	1.5	2.5
	天気	●	●	●	●	●	●	●	◎
	記事								
館山測候所	海面気圧	1007.4	1006.0	1006.0	1004.7	1003.1	1003.4	1003.9	1005.0
	降水量	1.5	4.5	17.0	3.0	6.5	—	0.0	0.0
	天気	●	●	●	●	◎	◎	◎	●
	記事								
千葉測候所	海面気圧	1008.2	1007.8	1008.2	1006.7	1005.1	1005.1	1005.6	1004.8
	降水量	0.5	4.5	21.5	12.5	21.0	0.0	2.0	6.5
	天気			●		●		●	
	記事								
勝浦測候所	海面気圧	1008.1	1007.9	1006.7	1005.3	1004.8	1003.2	1004.1	1003.9
	降水量	0.0	1.5	9.0	3.5	131.5	16.0	0.0	0.5
	天気			●		●		●	
	記事								

4 气象台気象観測資料